

記録メモリが語る満蒙の多民族農村社会

—満鉄と満洲国による農村社会調査について—

(要旨)

ブレンサイン(滋賀県立大学)

第二次世界大戦終戦までの満洲—中国東北三省や内モンゴル地域は日本によるアジア植民地の一部であった。この歴史はこれらの地域の人々にとっても日本にとっても深い歴史の記憶として残されている。モンゴル系やツングス系のような牧畜、狩猟民族も多く居住するこれらの地域では、日本主導の近代的な手法による社会調査が多く行われ、これら多民族雑居地域における最初の本格的な社会調査の貴重な記録メモリとして残された。これらの調査を主導したのは満鉄や満洲国政府の関連機関であったが、多民族雑居地域の基層社会の詳細なデータが記録されたのがほかのアジア植民地社会調査と異なる点であり、被調査社会のみならず、調査者にとっても貴重な近代的社会調査の経験であった。

本報告は、満鉄と満洲国関連機関が行った多民族農村社会の実態調査を系統的に紹介すると同時に、戦後の視点から日本と東アジア関係史上特殊なこの時期に残された記録遺産との向き合い方についても考えたい。